黒い尉に思うこと

弘本　由香里

「鳴るは滝の水、鳴るは滝の水、日は照るとも、たえずとうたり、常にとうたり」一年の始めを、翁の一節・はつらつとした千歳の露払いの謡と舞で迎えることができるよろこびは格別です。二〇一八年も大槻能楽堂の新春能「翁」で、清々しく迎えられ幸運でした。

思い起こせば、私が初めて能舞台を訪ね、生の能に出会ったのは、一九九〇年の年始のこと。京都観世会館の「翁」で、小鼓の頭取が久田舜一郎先生でした。それまで書物や映像をとおして興味を膨らませていた能のイメージは一瞬にして覆され、圧倒的な躍動感と理屈や時代を超越した根源的な生命感に、大いに驚き興奮したことを今でも鮮明に覚えています。

天下泰平を祈る、白い尉（翁）の厳かな謡と舞は大変ありがたいものですが、心躍るのは土の匂いのする人の姿で現れる黒い尉・三番叟の舞です。五穀豊穣を願って大地を踏み固める揉の段、種を蒔き聖霊と戯れるかのような鈴の段、大地と実りと身体のつながりを呼び覚まされるような心持ちになります。あぁ、これが芸能の原点なのだと気付かされる思いがします。能が大成され、土着の芸能から洗練された芸能へと姿を変えても、その後何百年もの時代の波に洗われても、三番叟の土の匂いを決して捨て去ることなく、むしろ大切に包摂し称えてきた能という芸能のありように、私は強く惹かれます。

ところで、天孫降臨の露払い役を務めたとされる猿田彦大神を祀る伊勢の猿田彦神社で、岩手県・早池峰神楽の三番叟を観たことがあります。そもそもは、早池峰山の修験者（山伏）が伝えてきた神楽で、能が大成される以前の姿が一部に残されているともいわれ、能楽に続いて二〇〇九年にはユネスコ無形文化遺産にも登録されている貴重な民俗芸能の一つです。必ず順番に演じられる演目・式舞の六曲の中に、「翁舞」と「三番叟」があります。

早池峰神楽の三番叟も黒い尉面ですが、不自由な体で生まれた蛭子命（ひるこのみこと）が、人生のさまざまな辛苦を乗り越えて成長し恵比須となる神話が繰り広げられます。アクロバティックな舞は、観客を大いに引き付けます。さらに、三番叟のもどきを登場させて、面白おかしく成長をなぞっていく演目もあります。能が大成される以前の翁猿楽は、多くの修験者たちによって、全国各地の寺社を拠点に演じられてきたのでしょう。そして、翁のもどきとして庶民によりそう三番叟は、それぞれの土地に暮らす人々の心の支えとなる物語の主人公となって、生き続けてきたのだろうと想像をかきたてられるのです。

都も東北も大地と海でつながっている、能舞台も市井の人々の悲喜こもごもにつながっている、低きも高きも隔てはないのだと。二〇一八年の世に向けて、黒い尉が教えてくれているように思えてなりません。

（大阪ガス　エネルギー・文化研究所
特任研究員）

平成28年１月４日　大槻能楽堂　新春能　『翁』
十二月往来 双之舞

写真　森口ミツル